



鴻文会会報

第 4 号

発行・鴻文会

753 山口市吉田1677-1

山口大学人文学部内

電話(0839)22-6111

(内線) 808

郵便振替口座

下関0-15902

「雑感」

鴻文会副会長 大塚博久

卒業後、どうした風の吹き廻りか、山口大学に職を得て、二十数年間、出身学部的身近かに勤務してきた私は、時代とともに変転する山大王の姿を日常目撃する破目となった。廊下を行き交う学生たちの、一種独特の高い調子の、早くて止めどもなく続く会話、轟く靴音、こだまする嬌声。車、また車の傍若無人ぶり。……だが、私には、木造の文科棟を下駄で歩いていて、英文の小西先生から厳しく叱責され、以後は素足で忍び歩いた、学生時代の記憶が甦ってくる。

学生にとつて、「大学はわがもの」という意識は、現象的な行動様式の違いにも関わらず、時代を超えてずっと変わっていないように、思えるのだ。この青春驕傲の意識は、卒業後、一旦は稀薄になり、急速に忘れ去られるけれど、同窓会の活動が依拠し、あるいは喚起したいのは、まことは、かかる意識なのである。

昨年、中文と十二期以前の中哲の卒業生とが集まって、恩師岩城先生の還歴を祝う会が催された。最古参の期と若い期とは、親子程にも年令の距たりがあったが、二三期ごとに中心になる人がおり、又それを上・下の世代に連結する人もいて、この人々の活躍により、爽やかで熱っぽい雰囲気醸し出されて、楽しい会となった。これらの人々は、いづれもかつての研究室の「主」である。

最近、自己のアイデンティティを確認するために「自分史」を書く試みが流行している。溢れる情感の中で自我を確立した学生時代の「自分史」を、同窓会で集積していけば、それは自ずと、文理・人文学部の歴史を語るものとなるだろう。すでに山口大学には『三十年史』が存在し、研究や教育についての詳しい記述がなされている。しかし、各自が真摯に生きた想いを、それぞれに語っていくことは、「正史」を補う意義だけでなく、より人間臭に満ちたユニークな「野史」となるだろう。

わが鴻文会が、そのような仕事に着手することの必要を、明日はわが会の一員となる在学生の、屈託のない在りようを眼前に見ながら感ずるものである。

(中国哲学・文理学部第四回・昭和三十一年卒)

私の中の山大・山口

同窓の仲間ただ一人

溝部 忠 増

(西洋哲学・文学部第二回・昭和二十九年卒)
ここに昭和五十一年につくられた「卒業生名簿」がある。文学科名簿の第二回(二十九年卒業)の西洋哲学コースには、私の名前しか見当たらない。たしか在学中には仲間がほかに二人いたはずだが、結局、同じ名簿に加えられない結果となったようだ。西哲は一回二人、三回一人、四回三人……という具合で、大学発足当時は、きわめてきびしい状況だったことを、名簿は物語ってくれる。

それにしても、私はお粗末な学生だったといまにして大いにハジいてる次第である。はつきりいって、西哲をえらんだのは、学問のためではなく、卒業後の生活手段への「近道」と考えていたからにはほかならない。だから、いまの私の頭の中に、当時教えこまれたヘーゲルも、ヤスパースも全く残っていない。こんなことをいえば、不遜な言動かもしれないが、学生生活と実社会は大いに違うわけだから、「カレッジライフを大いにたのしめばいいのではないか」と考えていたらしい。

いまの後輩諸君、とくに在学中のみなさんと語り合う機会はないが、戦後の混乱、教育改革、大学紛争……など、約三十年の歴史を経て、大平ムードにあぐらをかきすぎているのではないか。生活をとりまくいろいろな分野がめぐまれますぎており、衣食住とも二十年代の当時に比べ、格段の差があると思う。

ないかもしれないが、いまの学生諸君に望みたいことは、まず体をきたえてほしい。どんな環境におかれても立ちあがれる体力と馬力をそなえてほしい。次は読書。自分の専門にとらわれず、いろいろな分野の本をたくさん読んでほしい。さらに社会のためになるボランティア活動に参加してほしい。

大学生活の意義は、人生のなかばすぎでからふりかえってみて、はじめてわかるものがある。こういうのも、私にとつて、大学時代にひとつ記憶にとどまらないほど、無意義なすごし方をしてきた反省からである。いま一度、この平和なときに、大学生活が送れたらと考えている、きょうこのごろではある。

私の中の山口

羽仁 和子

(朝日新聞PRセンター室長)

(国文学・文学部第十一回・昭和三十八年卒)
白いすじ雲が浮かぶさわやかな秋の日、久しぶりに山口を訪れた。県庁にまっすぐ通じるパークロードと名付けられた道を車で走る。あれから二十年、傍には県関係の庁舎になった文学部の校舎がそのまま残っている。古きよき伝統を受け継いだ経済学部の講堂、校舎は跡形もなくモダンな美術館にとつてかわられ、教育学部は市役所に変貌。そんな中で、亀山公園は今も緑多き姿を静かに横たえている。——亀山の自然に浸る快さに言葉統く道今日ものぼりぬ——あの頃、友人と幾度この丘に登ったことか。独歩の如く「山林に自由存す」の気分であった。

それにしても、よくぞ文学部の校舎だけ残ったものよ。車からは背伸びしてみなければ

ば見えないが、懐かしい研究室、教室もそのまま。文理で一番大きかった十八番教室も、秋の陽を受けて輝いている。そう言えば、この十八番教室の前に、小さな暗い部屋があったのを覚えている人はいるだろうか。縁あって、私はこの教室で二年間もドイツ語の勉強をした。ドイツ語の好きな者七、八名の集まりで、予習は大変だったが、専門外の人も触れ合える楽しい時間であった。

専門の国文学関係の講義は、よく二階の突き当たりの部屋で行われたように思う。この教室は前しか入口がなく、遅刻したりすると入るのに勇気がいった。ゆつたりとのどかな関守先生のお声をしばらく外で聞き、心を鎮めた後戸を開けるのだが、時に突っ拍子もないう音がして、皆の注目の中小さくなって入っていった。関先生の国語学概論は、それまで全然講義のなかった分野であった。それだけに戸惑いもあったが、新鮮な感動を覚えたものである。この時のテキストはまだ大事に保管してある。

『伊倉の雨』

渡 辺 晃

(考古学・文学部第一回・五十七年卒)

「ああ、今日も雨か。このぶんやたら午前中はまた水汲みやな。」
昭和五五年夏、この年ほど雨の多い夏はなかっただろう。掘っても掘っても水が溜り、調査の進行を遅らせてしまう。

われわれ考古学研究室は、昭和五四年文学部人文学科の一学科目として誕生し、将来に向けて基礎を固め足跡を残していかなければならなかった。そこで、昭和五五年から三年間、当時の鈴木博司教授を中心として「西瀬戸内における弥生式土器の編年的研究」というテーマで、文部省科学研究費補助金を受け、発掘を含めて活動に取り組みすることになったのである。

その一年目にあたる年、下関市伊倉遺跡の調査を実施したわれわれ二〇人は、毎日のように降りつづく雨に悩まされ、水を汲み出しは掘り、いわば調査の半分以上が雨とのたたかいであった。

午前八時全員そろって朝食をとる。ご飯とみそ汁、それに漬物。学生が食べる朝食にしてはとても贅沢だった。午前九時作業開始。それぞれ手に鍬やスコップをもって現場へ向かう。昨夜の雨で遺構に水が溜り、まるでプールのような。しかたなくバケツで水を汲み出しきれいに掃除する。この作業で午前中を費してしまふ。

昼食のあと遺構を掘り進める。一層ずつまぢがえないよう掘っていかなければならない。ああでもないこうでもないといいなながら土を



剥がしていく。なかには仲間同志で喧嘩をし
ながら掘っているものもある。

何やら突然むこうの方で歓声があがる。行
ってみると見事な木葉文のある弥生式土器片
が出土したようだ。全員集まって三三七拍子
近所の人たちが驚いた様子でこちらの方を見
ている。

午後五時作業終了。宿所へもどったあと、
近くにある酒屋へ行ってビールを二〇本買う。
午後六時から夕食。毎晩のように小宴会が
始まる。午後八時からミーティング。今日の
調査報告や翌日の作業計画について話し合う。
その後、全員で大トランプ大会が始まり、午
後一時の就寝時間まで延々とつづく。

こういった中で、多くの地元の人々の協力
を得て調査を終えることができ、その集大成
としての報告書も、後輩諸氏の手によって刊
行の日の目をみるに到った。当時現場で同じ
釜の飯を喰った仲間も現在では各地で活躍し
ている。

一日の作業が終わった夜、その頃ヒットし
ていた谷村新司の歌「昂」をみんなよく唄
っていた。大好きな曲である。今でもこの曲
を聞くと、なぜか当時を思い出すのである。

いま山大・山口は

人文学部研究室紹介

東洋史研究室

卒業生の皆様に東洋史研究室の現況をお知
らせることができます。研究室の



創設に大きな足跡を印された小畑龍雄先生は
古稀の寿を迎えられますが、ご郷里の京都で
お元氣にお過ごしでございます。現在、研究
室担当教官は、明清史を担当する山本英史氏
と唐宋史を担当する畑地正憲の二名でありま
す。研究室在籍生は、四年生十四名、三年生
十名、二年生九名の計三十三名であります。
昭和五十八年度までの卒業生数は、男子百
十五名、女子四十七名、合計百六十二名にな
ります。最近五ヶ年間の卒業生数四十四名の皆
男女比率はほぼ同じであります。卒業生の皆
様の就職先は、文理学部時代には教員・公務
員就職者が多数でありましたが、人文学部に
改組され、研究室員の増加によって、一般企
業への就職者が増えており、就職先の多様化
が顕著であります。また、大学院進学生の中
にも就職への途を歩き出した人がでてまい
りました。

研究室在籍生は、自主ゼミや勉強会を積極
的に催し、またスポーツ、コンパによって相
互親睦を深めています。毎年二、三回の日曜
の一日、卒論発表会を実施しております。卒
業生の皆様にも、是非ご出席下さいまして、
新卒者に対してご鞭撻を賜わり、激励して下
さいますようお願いいたします。二百名にな
らんとする卒業生の皆様と、在学生との交流
の機会がより多く持てますことを祈念いたし
ております。
(畑地正憲教授)

英語学・英米文学研究室

人文学部棟六階東端に位置する英語学・英
米文学研究室には、毎年二〇数名の学生が進
学してくる。実際の志願者はこれよりずっと
多く、また数の上では圧倒的に女性優位であ
る。

人文学部発足とともに、英語学と英米文学
は別個の学科目となり、所属する学生も異な
ることとなった。しかし、研究室や図書室な
ども共有し、諸行事も一語で、同じ仲間うち
である。

教授陣は、鴻文会の会長を務める和田敏英
教授が一八世紀の小説、鈴木雅之助教授がロ
マン派の詩人、山本和之教授が現代英語、鈴
木重樹助教授が古代・中世英語の各分野で活
躍している。これに英人アレキサンダー・ブ
ルース氏が外国人教師として勤務している。

文理学部時代の一時期、卒論に代わる演習單
位を設けた時代があったが、今では再び卒論
が必修である。学生の就職先は、文理学部時
代には、その殆どが就職についたが、現在
では最初から就職科目をとらない者もいて
実業界への進出が著しい。卒業生の中には、
京大をはじめ全国の大学や短大・高専で教え
ている者も少なくなく、また国家公務員上級
試験に全国のトップで通って官界入りした逸



材もいる。実業界入りした卒業生も好評で、
みんなそれぞれの分野でがんばっているのは
頼もしい。

研究室活動は、クリスマスの創作英語劇、
ハイキング、スポーツ・マッチとなかなか盛
んであるが、以前のように勉強の方の研究會
がなくなってしまうのはいささか淋しい。
学生の人数も多くなって多様化したためか、
ちよつとつかみどころがなくなってしまうた
が、英文の良き伝統は今でも引き継がれてい
ると思っている。

今春、山内正一助教授は九州大学教養部に
転出されました。その後任として、鈴木雅之
助教授が、本学教養部から配置替えとなりま
した。
(山本和之教授)

山口点描

平川

卒業生の中に「平川」の名が馳みをもつのは、昭和四十五、六年に卒業された方々からではないでしょうか。山口大学文学部が後河原から、平川キャンパスに移転したのが昭和四十三年。移転当初は、キャンパスの整備まで手が届かなく、ブルドーザーに掘り返された生々しい土肌がそのまま残されています。山口から平川キャンパスに通じる道路も農道と兼用で、山口と平川を往復する学生には心細く感じられたものです。ところが移転してすでに十六・七年。今ではすっかり模様が変わり、平川キャンパスの樹木の幹も太くなり、平川地区は住宅地区として山口市内でも最も人口が急増している所となっています。

平川地区の歴史を調べてみると、興味をひかれる事実にいくつも出会います。平川と呼んでいる地区は、中世から、平井、吉田、恒富、平野の四つの旧村から成っていました。鎌倉時代の初め、建久八年(一一九七)に、仁保に平重経(相模の豪族、三浦氏の一族)が地頭職に補任されて来ます。この時、恒富保(現在の吉田と恒富の両地区)も併任されたということです。後に、重経の四男重継が分家して、恒富保の地頭職をついでいます。仁保と平川を結ぶ中間に大内御堀地区があります。ここを根拠とする大内氏が頭角を現わす以前のことですから、平川は山口盆地の中でも、最も幕府とのつながりが早く出来た地区の一つのようです。文化的にも、

他地区に比べ進んでいたのかも知れません。先の四つの旧村には、それぞれ立派な氏神社があります。平井に日吉神社、吉田に平清水八幡宮、平野に日吉神社。中でも、人文部に道路を経だてて鎮座しておられるのが、恒富、吉田の産土神として創建された平清水八幡宮です。縁起は大同四年(八〇九)、豊後国宇佐八幡宮の分霊を奉じたときとされています。現在に残る社殿は室町時代初期のものでいわれ、神社建築としては県下最古のものです。地区の人々による管理もよくされており、社殿裏にはしょうぶの自生地もあり、人文部の学生には逍遙の場として恰好の所でもあります。懐かしい思い出のつきない方も多いことでしょう。

平川の名のおこりは、明治二十一年、平井村と黒川村が合併して一村となった時に始まるようにです。



平清水八幡宮



人文学部屋上から平川方面をみる

昭和59年度人文学部学生数

専攻科				
哲	史	文	中	合
学	学	学	学	計
2	3	1	1	7

(1984. 11 現在)

語学文学科											人文学科											学科	
合	計	言語学	フランス文学	ドイツ文学	英米文学	英語学	中国文学	中国語学	国文学	国語学	合計	社会学系	考古学	西洋史学	東洋史学	国史学	美術史学	史学思想	中国哲学	倫理哲学	哲学	学科目	
79	12	11	6	10	13	7	10	10	94	29	8	10	9	11	9	10	3	5	2年	3年	4年	合計	
83	12	10	2	10	11	15	12	11	109	31	13	11	10	11	8	9	4	12	3年	4年	合計	33	
79	11	12	4	11	13	7	10	11	115	32	7	9	14	13	10	11	3	16	4年	合計	33	33	
243	35	33	13	31	37	29	33	32	322	93	29	30	33	35	28	31	10	33	合計	33	33	33	33

鴻文会第4回役員会

昭和59年 5月19日

昭和58年度事業報告

58. 4. 28 山口大学日中学術交流奨励会発起人及び設立総会出席 (和田会長)

5. 21 第3回役員会

12. 17 「鴻文会会報第3号」発行

昭和58年度収支決算書

収入の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
繰越金	1,081,143	1,081,143	0	前年度より繰越金
会費収入	1,650,000	2,714,000	1,064,000	5,000円×542人(再度一人含)+4,000円*
名簿売上収入	—	1,000	1,000	「鴻文会名簿1982年版」一冊
雑収入	55,000	70,085	15,085	預金利子 53,585円、30年史代 6,500円、 社会学への振込金 10,000円
合 計	2,786,143	3,866,228	1,080,085	

*昭和59年3月31日までに払出したもの

支出の部

科 目	当初予算額	決算額	比較増減	摘 要
会議費	29,000	12,320	16,680	役員会(58.5.21)役員車代11,000円(市内2,000円×4+市外3,000円×1)、同茶菓子代1,320円
印刷費	120,000	80,000	40,000	会報印刷作成費(2,300部)80,000円
郵送費	121,200	115,280	5,920	役員会案内状往復葉書1,200円、(80円×15)、会報 郵送料112,300円(1,865×60円+400円)、会報原稿 依頼郵便料900円、その他の郵送料880円
寄付金費	50,000	50,000	0	日中学術交流奨励会
謝金費	55,000	56,000	△1,000	会報宛名書等アルバイト36,000円、幹事用謝金 20,000円
雑費	21,000	74,175	△53,175	会報発送用封筒(2,000枚)4,725円、会費未納印 1,500円、電卓8,800円、会報用写真等1,650円、鴻 文会名入封筒(8,000部)36,000円、会費返却5,000円、 30年史購入及返送金6,500円、社会学への振込金払 10,000円
予備費	2,389,943	0	2,389,943	
次年度への繰越金		3,478,453	△3,478,453	
合 計	2,786,143	3,866,228	△1,080,085	

昭和59年5月19日監査の結果過誤なく適確に経理されていることを確認します。

監 事 森 田 良 吉
行 村 和 男

昭和59年度事業計画(案)

- 1. 山口大学日中学術交流奨励会理事会及び総会(5月17日)
2. 第4回役員会(5月19日)
3. 「鴻文会会報第4号」発行(59年12月予定)
4. その他

昭和59年度予算(案)

収入の部

Table with 5 columns: 科目, 59年度予算額, 58年度予算額, 比較増減, 摘要. Rows include 繰入金, 会費収入, 雑収入, 合計.

支出の部

Table with 5 columns: 科目, 59年度予算額, 58年度予算額, 比較増減, 摘要. Rows include 会議費, 印刷費, 郵送費, 寄付金, 謝金, 雑費, 予備費, 合計.

Table with 10 columns: 学科学目, A卒業生数, B公立学校教員, C私立学校教員, D進学, E公務員, F民間企業, G計, その他(公・教希望, 家庭). Rows list various disciplines like 哲学, 国文学, etc.

人文学部 人文学科・語学文学科(文理文学科含) 卒業生科目別進路状況一覧表 注()数は女子を内数で示した。

通信 ☆ 鴻文会第二回総会が来秋に予定されています。第一回総会には六十一名もの参加がありました。次回には六十一名もの参加が...

独文科卒業の皆様へ 昭和二十七年より山大にお勤めになり、二年の永きにわたってご指導いただきました中野安久先生が今年度三月で定年退官をお迎えになります。我々卒業生は一堂に会し、先生への感謝を申し上げたいと思います。三月後半是非お集まり下さるようお願い致します。詳細は追ってお知らせ致します。(岡光)

就職者の産業区分表

Table with 3 columns: 産業区分, 昭和58年度, 比率%. Rows include 農業, 林業, 漁業, 建設業, etc.

注()は女子を内数で示した。